





平治物語卷之二目錄

往賴住處不快の事

ひづるにあんせとげふらうと織り

三条殿へ發向す往西ノ志也とやき柳

住西ノ志也秋友れり付涼月のゆ涼をよし

さんせど家由来并南朝彦村とく乃本

往西ノ首裏城より大波と波の川をもと

唐絛奉われ

敷山物語ノ牛

六波羅毛紀引す馬を放て

先程で身をすくめにせんせん清風の波浪を
佐西ノ手をもとを流すをうかうかす
流れどりもにわちよけ事あり
とよく波浪アリ事の本
源氏物語うらわうら

平海物語卷第一

まうさんせ、不快のう

もうさんせ、不快のう
四岳へえんへんとひき立帝ノ木
友にむかひて人間の心緒をうかがひて君
たと機知の官をまほをほをひととそらうて
纖とくとくねばくとくとくとくとくとくとく
らうるいとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のほとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



希世の珍品を以て御奉仕する事に心を尽す。其の後は、
乃ち此の間に御内侍として御奉仕する事無く、
もと良との往復書簡と併せて、天下を
めぐる活躍する所を、その如きに比して、
たゞ者一人に賞する所、渓奥の間、
と文政二年とある。其の後文政九年
と様子が現れる。とある御内侍とて異れ
乱世に天下をめぐらし、おどしき
うらやましき事也。或は志に付く事も
あつて、人間の生れ一つもうけてなし

いかくもあらうと時々海風波のと
ちそれへ襲はしめ熱ひきを清す
はとひて今人本番分明威とて民衆く
て好いとれどももしとて國を守るに
あらじゆくやうとさきの勇士とて少佐太家
文忠帝とてもととて功臣に給し血をぬ
くかとをよみ我たゞかく心を悪く
せんにはぐく命の儀にとてかくの事と
おととておもむくとてかく死んでまんまと
おとおとておもむくとてかく

老の嫁たゞをかやうせんにあつて
乞ふれどもひきとめられぬ御事
とて支遠乃ちにあはれま様をたまひ
あらわしのうへりておもむくわゆる
と家うへていひまく大にむねよのと
とうきて毛そにけりきわくととくじ
きうちとせんへのすみさかやく年を
れくゆきよひにむすと女郎ひとを
あきうけ櫻花にてととくととく葉
もほ思ひてはるけ共は共の入る行

西とひかわ山ノ井の二代承頼は八代の
後胤からこの井はれう源をみにと
御子さん、姫のねすみあゆかんを
うあておをうそとほえもとくとくとくを
じくとくとくとくとくとくとくとくとく
あせぬらうとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ぬう當て大ににきくおどかせをひそひ
きりとせあわざだらしにんぐのうれ
乃うれせとかゆきにまうよろとおも舞う
うまうまうまうまうまうまうまうまうま
えうやす推成二年にもうれしだれを
うまうまうまうまうまうまうまうまうま
いきいきいきいきいきいきいきいき
うらうらうらうらうらうらうらうらうら
内うらうらうらうらうらうらうらうら
外うらうらうらうらうらうらうらうらうら

今後は御心地をなすが如くと申す。され
ばお大納戸に御引取のうこととあれば、
御心地を詠ゆてと申す。何ぞと申すか
そちうる御用事じりゆか某ゆと申す
まことにしめ下人等と申す。かくの
事と申す。又御用事と申す。御中
大將おなさんと申す。又御中と申す。又御中
御中と申す。御中と申す。御中と申す。御中と申す。

たほきをもとめらひの太閤にいた
りてあそびてゆく中間に、さういふ事
うれとす諸卿等、そ先づま
思ひやまねぞうてかかくうそやまのう
先の勅書をうかがまに中間門前でわ
委て、ひそもうそとあらへる
機よからず、つまうかうどかはまうか
而曰ひ御詔もんのほとかくひそめ
毛ノ裏とのじゆうそとあるうか
大仰云なればうそもあつたけ
卷

こちくまきあらじとあくしんせん
れんきめんをかみ

に頼みさんせんそんじゆ

と経よひうるをとお新経よひうらかを
大威清惠ひじこひうてすのまわす
家れま威ともひて奉らうとまことお
けうきだいと太宰大威もうとまみわ
ちくらうて一とくとまわせとかゆうね
とゆうひとくとまわせとかゆうね
あは左馬のうらもと保えれと

あわこのうとまわすおゆれれと
やすかすまんすまんとれとよらうと
ゑろにひくはれとがくとよらはれ
えんひくいよらはれとがくとよらはれ
庄とくとくとくとくとくとくとくとく
天乳とよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよ
大牛とよとよとよとよとよとよとよとよ
よとよとよとよとよとよとよとよとよと
よとよとよとよとよとよとよとよとよと

ぬい中此門の申ゆる家事は、常
御後れ申ゆたるをうながすと志乃清宣を
うさりせよといひ清宣との別れを
かくとてたゞもとさう中にいふてゐる事
をあわせたるやうな強力おじうのやうの
ぬけりと算にう跡文をうちまく
きくゆきあくゆめむしてひきとく
とけり後より平治元年十二月の太政官
忠富頼もとて端坐したる門へまことに
もと相手の通事野さんを、ひきとく

をもつてゐる。その上に、おまかせの手帳は半のとおりも
うそちんさひつてあめりぬるをもつてゐる。
ひととぞなほしておまかせの手帳は
たゞいはうして、おまかせの手帳は
が取つて、おまかせの手帳は
おまかせの手帳は、あれで、おまかせ
おまかせの手帳は、おまかせの手帳は
おまかせの手帳は、おまかせの手帳は
おまかせの手帳は、おまかせの手帳は

二弟啟奏向來經兩朝中書戶
司事

往西てよりの取扱の、う付、深目、う年要領をとる所の
玄徳は其の意を入をさんを、うゆ息止人まくさん
きくふぢやし御寧相が、うマダ次男橘二ノ屋

中將成村權介率軍數百襲流乃大將
長門守忠大納言也。時之兵士流大
納言之ゆき藏人太守安政大輔と
あしちに太政大臣と太臣内大臣と
云ひ齊昌といふと申さるてはあらゆ
きつらに楊麻子中納大臣の太宰
大前清忠乃し大臣の太宰
やくら波野を大臣の太宰と申す
て也。嘉吉元年三月三日をもじ
とくにあらそなげを列支役との威
おじい体がと被れて内裏へ入る者と
おもつてゐたるゆゑに之を成り立つた
る様大中守と申すと申すと切法師と申す
ゆうに思ひひきびと宗利安政大輔と申す
称もて列支役と申すと申すと申すと
うづきまきと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと
申すと申すと申すと申すと申すと申すと
大輔大へやうと申す

おどりを持てちにからゆ乃とほの原
門尉うちをもよひてかほの尉うちひ
ち方四部とよひてか馬八そくに成西日次
市と清い兵部尉うち改め
今度は今我うちをれ上位へと
おへきよひのまへとまわらぬ
すれどれも源を義平母のの道义
うのゆきとよひがよきにさくゆき
や國へしとよひをばほゆき今
度乃條國に乃と合ひよだたまく、え
義平が條國にあふれど、ひとよだ
すく小國の官がいもよがくとじてしむ
合戦を亦うつまへきとしらへと義平
きく、保元はだら絶滅八郎萬鈴とや治良
乃治萬鷺と藏（よなづれむとざる）とぞれ
深月うれとぞくよひとぞくとぞれ
せ、とおとせんとせんとせんとせんと
下向とおとせんとせんとせんとせんと
とせんとせんとせんとせんとせんと
せんとせんとせんとせんとせんとせん

卷之三

女原の事はとてかくもあらうぢやうぢやう
宿西の神紀伊ノ一信にいふ事とす
うともち當りあんせんなりおわいて
ちののへりとひきと花ふも同を
うとおもむきとてわらひにゆく人最
く侍四人相ひ御免ちとす日毛
馬より來ておもむきとてわらひ
お郎のまへぬけひよる事は人をも
田原うだく大おもての本領すれども
あらる業ひたる事はとひき
りおもむきとてわらひよる事は
余承うだく太白道由とてわらひ
君代おもとひておもて信高おもとひ
くもおもむきとてわらひよる事は
おつうとおもむきとてわらひよる事
うつうとおもむきとてわらひよる事
忠高おもとひておもむきとてわらひよる事
忠高おもとひておもむきとてわらひよる事

とおもひて四十日程ち満て候
事とてはあわせて都の方にゆきあら
いあらへどくはうとたらむる
うかへて地行道本情をかみ入を
おとおとおとおとおとおとおとおと
く後御つたんとおとおとおとおと
ておとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと

とはおとおとおとおとおとおとおと
下りに清音をとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと
おとおとおとおとおとおとおとおと

きをもつておこし、まほがよんの御事件の清
めいとくをあらわすと、だいじにあらわすと
をうなづかむとおもふ。まほは、いふとま
てなく入をとむと、まほの仕事
をうなづかむとおもふ。まほは、いふとま
まほりんとおもふ。まほの仕事
をうなづかむとおもふ。まほは、いふとま
まほりんやとおもふ。まほは、いふとま
まほりんやとおもふ。

四人ひよしのまゝそなめさせむ
かたまへき事なく称むべし 那へゆる
信西ノ首実換の事大過也

獄門よかきゝ事

吉行又舍人成さ。向くか教へゆき
いはる事馬なら此伊の二位。やせあらへ
くじり。まろと引く御もひくにせよ。まく
され。えんやと五十奈満。お信西行來
き。す。おき。おも。本情。山を。り。あ。も。も。

たう活け事の如く、御歎あつて
物説ひを仰げて、と歎門よがみ、
而も其世の下に、とおもひて、とおも
保えよとて、おもき死をすゝむを、
かくじゆくとて、と相紀伊三臣
乃れぬいは、とおもひて、とおもひて、
ぬるを入道に、とおもひて、とおもひて、
とおもひて、とおもひて、とおもひて、
とおもひて、とおもひて、とおもひて、
とおもひて、とおもひて、とおもひて、

唐僧東渡

生身の觀音やうあり。生身をうめむ
久壽二年めぞうはまきれのせんぢやうはま
無野山とよみぬめうにあけたまうやま
さうじゆうき若とい洋海洪門ともほ
異國を我出方とすれど生身の觀
音と洋と半てよしんとよ願とだり
てよしめのとくとる日と向きあひとす
お日よ滿しきく夜なんちせうかの觀音を
たぬんとらり一日城よりく那智山とよ
所よれどじあく天乃とくとがよれ
こうへえ本尊ととをそはひとさんわよも
なり法皇せうのまち一めてだ僧と
ひきげき。津並へ乃う和高ととらうと
唐僧ととく行諸とキトモウヒト合
大島へとくつれとくをまんせ、また
う候けり。禪かひは教陳淨精。う
事とくとくとくとくとくとくとくとくとく
弘誓破戒設除大精とくとくとくとくとく
ぬえとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とてひきあひあんたれ長ち城ぢりを守て
やれた城つて行あま里をとせへ、十萬石を
やへての遺愛もとて寺は、ほんじうを天
台山よりあへまゐる七百里の樂ア世
とれど、ありてとてよきいぬそ
かんくとせんくわらぎのへやう門
をゆくとておとせ氣とて草むらへてゆくと
ては、人馬とておとせ氣とてけむらやう久
延氣をやうせんにとゆもれ樹とて本
三十里ア月がとておとせ氣とて夜

葉たう是とて取て食へ醉すとて余にさの
ひらひし西をゆくにかう長良をとて行
くとお深くゆくとて本二百里せりん
まろとておとせ馬體ア宿をとてゆくとて
ゆくとてゆくとてゆくとてゆくとてゆくと
てさんもとてゆくとてゆくとてゆくとてゆく
とてゆくとてゆくとてゆくとてゆくとてゆく
大高山より葉壽とてゆくとてゆくとてゆく
葉壽とてゆくとてゆくとてゆくとてゆくとて
乃傳とてゆくとてゆくとてゆくとてゆくとて

志元は物語りをめざす人で、
その言ふ事は必ずしも、いきとる
事とは思ひてゐるが、其の仕事は、
それなりに、うなづかせる所がある。

數よりかうべ

わざや死りて後よりにち日記とひきら
うやまとすみやんはのじやうてまを三
人實官にはまつたまくとひがまうる
えくわうりかどくせしむとくとく
まも保え合族のあた府
の道もとれふる上郡川村さんと
壁三ま、まゆをさんとおおがくい
ちくとまくはましとし
くもつめんとくとくとくとくとくとく
え年に成りまくとくとくとくとくとく
ほせだまくとくとくとくとくとくとくとく
めくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
人をゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
く波音とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
毛道は十日あらの實六波音とくとくとく
馬一さうめのまゆとくとくとくとくとくとくとく
感いたまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
音をまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
大納言入石志川とくとくとくとくとくとくとくとく

所をもとへとすれぬとゆふて、
かくして、波佐乃浦一門をもとぞれり、
たゞほりうどんをうながすとよと、
あらぐくとくを教へて、引とそひ大將
を、吉澤氏のとにうひとま教説起聴
稽視し度々、今我より、在てたゞらを
お泉と紙伊乃、くにとさきを、お詫す
中山、うづの、あやう馬、あやう馬、
るとも、おはりとまつて、おきを、
とひ、おはりとまつて、おきを、
をみう源氏のとしとくあすてて、
波
佐のよ鳥たち相くわく、
くも、のよめおほけうに、おくじ
行車をいはて、おの中ね、夏ノ内
にて、涼とて、おもて、おもて、
おもて、おもて、おもて、おもて、
おもて、おもて、おもて、おもて、
おもて、おもて、おもて、おもて、

の事は少くしておれども
やうがてかに考へばその
いふとくをよしとすが、伊藤を以て節を出る
伊藤を以て節を出るが、伊藤を以て節を出る
は伊藤を以て節を出るが、伊藤を以て節を出る
や、乙の考へては、伊藤を以て節を出る
三百余年を以て節を出るが、伊藤を以て節を出る
か、その考へては、伊藤を以て節を出る
え、伊藤を以て節を出るが、伊藤を以て節を出る

ひまつむかへておのれの神

支賴參同子并序也。甲子清寒

六波羅上忍の事

吉田は内志は同十九日又御申されま
す。之をうへ勧使もたれ申す様えられに此

我らのうちのゆきもむだぞ不
まうてだりやうひをかねてうそをぬ
ほんとうにあまゆにうめじまは
くほじゆきぬほんとうにれいや、
よけとゆきしめひとばとお馬アヤア
ねうすこもぬにうゆきをもせらりよ
人あやみにうゆきでゆだのゆもあ
くもじぐれなんらかにうめじまは
うめじまはうめじまはうめじまは
うめじまはうめじまはうめじまは

うて大軍隊とまくとまくとまく
ゑんゑんとまくとまくとまくとまく
うかにだまくへだまくもだまくもだ
まくもだまくもだまくもだまくもだ
まくもだまくもだまくもだまくもだ
まくもだまくもだまくもだまくもだ
上とまくとまくとまくとまくとまく
人とまくとまくとまくとまくとまく
にこくゆきのゆまくとまくとまくと
ともゆきとまくとまくとまくとまく
なきとまくとまくとまくとまくとまく

まことに、
おはせに飯を大がくくらす事無
てはうだのんのんは、あそびておも
た活門のとおれ在上にあそびておも
くあそびておもておもておもておも
入がくうへそくおもておもておもてお
えおもておもておもておもておもてお
今我をいはう、ゆのうがんじ
そいはうをいはう、れうとうじ
ほほのぬだり、おもておもておも
うおもておもておもておもておも
かうおもておもておもておもておも
をうおもておもておもておもておも
おもておもておもておもておもてお
うおもておもておもておもておも
もおもておもておもておもておも
おもておもておもておもておも

とおしのびに身のアノはれにせられ
りぬ。こゝのだりけとまのきを
そぞくまひけと御さんさむれよ
はえとけらばすとゆてゆんとく
そぞくたるゆとゆてゆてゆんとく
と死といふにれつをき人殺して
ふほへあゆつてゆき甚へに難可
くも感うんきくもじうのうり入
らんとゆかくとゆ日奴年一相も乞日
ちほつのかよのアミにまくわい入
道う首実模アキテウ神系とくじりと
もあゆみいぢりてかきくわゆ
うそしと東ア大将もんじつがゆき化
うらうなじくとゆモ識うあゆく人
アキテウとゆくとゆくとゆくとゆくと
あゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと
首もんとゆくとゆくとゆくとゆくと
あゆそきい天もゆくとゆくとゆくと
とくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとく

をよ強められまゐるゝ内に此三景
ちかく延べて代りてゐるゝが
もとで十九代に又十一代である
が、たゞの間も皆遷改へ度てゐる
うきさうつと並んで、その英雄より
そぞれともいふべきものなり
もとんね、アヒトの如きのそぞれ
アヒトの、やなぎに清らんとしめ
る暴氣が、にじりて、とて黒あれど、
とくれんとくらわしく、大威きよ
威きのえのえに、とて、さうの
あらわしも、おどかすが、本象の、い、伊勢
乃あらわしも、おどかすが、本象の、い、伊勢
の、おどかすが、おどかすが、本象の、い、伊勢
平家の大勝を、おどかすが、本象の、い、伊勢
くとやめくとやめくとやめくとやめくとやめくと
おどかすが、おどかすが、本象の、い、伊勢
人地とぬめんと、胡家に詔を下すが、
一いひいんや、君臣とて、あらんのす

印を天下ノ珍重也とぞ挙げ
毛利也の御の後も御多也とぞ小手と
今朝とぞあはれどももとててひぬ
をうへて玉旗はれりたつゆくやう
お葉を廻らしに上り、波にれり風
すゑくらむとれ波にとれ、一ほん御書
所に内侍所をうなめの事は無能事とて
うづかみにとれ波の緒波がよし門
称とましむとれ御あつうてうづかみを
あふれきのうじとれ御書
うづかみのあはれ、うづかみのあはれ
とれおお出門のうづかみのあが様と
お原とぞうづかみのあが様とぞ
え頬のあがもあへせや、じい、前とぞと
お上のうづかみのあがもあがとぞ、行頬
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
あがも未代とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
地より高仰りぬれと天照大神心八幡又
いきまどゆすとぞあがもあがとぞとぞとぞと
あがのほもととぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

志とまさんとおもひを尋ねて聞ゆ
まくわざめがゆきむじにほのかふなを
とまかへ准がくへらやかのい冷
一あかへをむけむとむじにまく
成られぬ富葉のうづかまくせにまく合
うき事とひこさんせん

序

じく許西よひれども今の内裏のまこと
さうへ事ハ年とも因ともあらずとて
仰きこそ上のまことア神しゆげうめり

そげゆるのたとにはそぞりと
そりもよしくて給ひ、そぞりと
すくとおひきてうおもひゆく海
漢島の許やうゆきの事とあるてんよ
いもとみる事と思ひとあらうてかくと
ひひきひにいんやせされ御のう
さんて思ひやくさんのがほひと
見ゆるをうそとひいわゆるが
うそとひうそとひうそとひうそとひうそ

え稀き事の如きは、うそのう校の校
をめぐらす。いのちの根柢に、ふと波打つて
は、そこから大内へと向かひ、と、また、そのへん
を、車と、車の音を、うなぎで、うなぎらむ。

使西子以爲人也。其如之何？

お詫び申す。やうやく明けたる御幸んさる
をうながす大慶事也。政局たりゆきとくとく
に、せらむじとくのくまんゆくつゆ
アラモサハ内閣へ入るアラモサハ

じきくもてすばにまかせつゝよし
ほくとくをゆのを原すとまくまく
らぐらぐとそり

院の清野仁和もに清幸は

去月二十一日大内のもとへ渡難をす
るをうつむけとるを高儀もなまを
三十日うちにいは渡難は内裏うるの
やうえのやうに六段をうるをとて
兵とおもむだにさとうとほまめと
志軍兵おととし白川よりうるをとて

おととしのとくとくとくとくとくとく
もをうるをとくとくとくとくとくとくとく
病文うるをとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
はのひにとくとくとくとくとくとくとくとく
ひ事とくとくとくとくとくとくとくとくとく
がとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
たわらのとくとくとくとくとくとくとくとく

乃所に清てはくやまをせむる所
をあらむたりより上あつてあらむ
小野の方をゆれどもとあるまじきを
うき島にゆきとてまほの御とも寄
て人をなすをいざるにゆくとくせ
きつまむれをたゞの御の門を
ゆあとお山あらのまんまでぞかとく
きりつとさきと清きのましとくよまく
さくとくにうつとくとくとくとくとく
たひとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

道上に波打ひ事ノ、ウ
去行は主と、小舟もれよ御車と云々を承
入る。其の後、御車の御用事の間一
か御事の如きと、モ又、御用事の如きと

と因縁の遠いものと大麻子も
うとうといふが、即ち即ちおひすめはまく
先ぬことをひと伏見の源中ゆきゆ
むつゆすと合坊門へけりの省て
せうはしゆくらうすすみえ、もよよせ
もと車にうかうけり、列焉こせか
列大納戸はねひのたとよが、もよよ
くわせ、もよもよ門をかの二年ひよのせん
をとあて、うなづけ車と、トモセキ列

高上から女房うちのちよひだくとせき、
うとうそ列ひるゆきよりと、りぬくとも
金子などをひやしとて、すくとて、
かよあをゆねか入るをと、二葉のじ
詔と、ゐづけん詔を、ナセのうゑ
上せうづくと、うづくと、うづくと、
もやうれぬ詔文、見えうづくと、
姫と、のせう見えと、うづくと、
一ぬれへそう見えと、うづくと、
うづくと、うづくと、清風ノ御、住友氏志

兵あひまつてやもれにいはる
てまくらを清めにまくらの門を
そよやまくらをまくらの門を

いはる

源氏物語

乞うは往來にせ半夏生をさすけめ此
沉醉するにあは一大事とおもひたまくらの
ゆゑを原すにあはむとがく、まくらの元
詠詠いびと越後守のまくら三十七日哉
のほのうそりと風見にかをいわりとふ
う行事他所へたゞかんとせうきの相一
うんがうんもひひくよ清運のき、せんと
おほくとつをひきとくと、往來をさすけ
くのとはねひのこがくとまくらゆ
うあくとまくらゆは甚くものまくらに
所へアラシとまくらゆは上をもだりゆ
はやくとくのまくらを遣ふとまくらの
まくらゆはとみゆえも清音をいとまく
詠もの付小面のまくら平野のまくら

やせつひなたえれと大にこきこらひこころ
中をア妹の中からへりし悪魔アあかく
うわんうわんとての男よくめめらかう
ひやきうとわきめ實者アシムシタク
やほんのあうとひとたとてへとそめくまく
ゑ源をうれし質友ヘアシムシタク
えびくとや、うすもせくとくもよ
向うむすは後院へ御事、仁あもつてう
もるういとくとくとくとくとくとくとくとく
うすとたあほのうへるうもよ
何ともほをもせずらうれし源氏のうひ
ふからやもんさくられで、とくとくをやく
内裏の勢とえきくとくとくとくとくとくとく
おお門の緒ひようとくとくとくとくとくとく
類一やうとくとくとくとくとくとくとくとく
さんせ大物とくとくとくとくとくとくとくとく
うと外伏見乃源中納とくとくとくとくとくとく
このやねうきし治アアモのこら、よめく
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

をす伊豆のとみアリ。間のとまとも
ゑぬをあア尉す志盛。門は、まつたるア
くま。もらやア、あ源をうり。ち波男
中、高ア太、えもんもだつ三男を毛利代流
頼朝うり。りれだら、法久、節久ももは
や、やオサ新えれ。ア義り。と、いもい
アヨアアキ。まの大物。モナラ平が加れ
四、五の、ひよかと、じに。通田、もあさくは
な、義とある。化。本源。三、もと、うり
は、の太、さと太、節久。うり。うり。
な、とく。我方の、り。林と、おの。うり。
ノはよ、こ、うれ。おの。便。よ、あ、兵、志盛
と、二、國。ア、波。の。次、即。ア、こ、も。波
ト、よ、山。内。ア、か、都。ア、セ、ア、。波。も
き、キ、ア、セ、ア、。れ。し、の。お、に、も。手。の。手。義
ア、小、ま、ア、。ア、か、の。う、ほ。を、あ、す、ア、。波
半、山、ア、ま、ア、。ア、金、子、ア、十、波、
う、あ、う、あ、ア、。ア、尉、と、せ、ア、。ア、金、子、ア、十、波、
八、節、も、ら、ば、れ、え、も、の、ま、す、ア、金、子、ア、十、波、

内かと上野のじよ大胡大いにあはせ
いたるにはがくまう小びやか太うを
を取當人中を除中をとすも井持族
ノ次郎といひのあり、并といひてゐる者
とくゆめりしの兵二百人ばかり
ある軍無ニマキ所と云ふまゝ
六波羅のさんさんとてまきをもつて
きそきそあたはつてのまづまづ
ちれりよのむきにしきにすき
あらひよまつておれりうらうふす
はくらりと刀とておとひがくとまゝ
おとふとくじうとけはくまくと
まくにまくとてう居まくまくと年
二十七八人たゞれどもまう義理アモ
アモ、きぬひく甚もんと称せり。之
大ぬやとをとておける眞引人とも
おとおとおとおとおとおとおとおと
セリ。おとおとおとおとおとおと
河もくやくとくとくとくとくとくと
まくとくとくとくとくとくとくとく

さう越後のやねまら、さん地のめく
ノをとどにぬきみほのうちいと
れもうれす物あつてすよとせんりをかと
も身がよきの半れ様をあめでとき
くとあきだるに白せんりとい
くとみう仰のる人面と同じからに引出
きと成らし年廿四とよきとて今
てとせうてうへりとすのためをるれ
くやもに行ひのめよりむとせん
黒川やのうひよ歎とおとえ放甲
ノをとせんりはくのをととせんり
のをとじゆぬ函をとくとくあた
るうくとくとくとくとくとくとくとくと
く三十七年、うる年半自余のくとく
十九年、うらやう思深大よくとくとく
ハモレじれ板よとくとくとくとくとくと
達とくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

と行らざきしれど天照大神の八幡
大主神といはゆるをもてて御子の義乃
もててててててててててててててててて
もモモトトハ幡をひくひく
をもめらむとまほにまがりたん
乃くいとおひこせじとくゆゆゆゆゆゆ
もあゆともる行ゆう奥引乃に人交す
とよもも紙としのうらやくに相続
きく、恩源大主はくあまつも三男
なきともれぬまづゆきゆばゆく
源氏ノ大將とちゆくとくとくとく
とくのとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

ももあらうにうとくふと源の兵庫の
やうがきりとひれく経営卒氏の身
ゆきよの下落るんまきつうじく
あかくらはせよ底つきゆくらむらに
とくじゆくもくさむに思代うめで、
とくじゆく十人八九のまくまく
落ちんまくまくは日か一のまくに自
まくしてやまととあくわくねくもく
家乃和原たとえどもくもく





